

「日本語脳」と「英語脳」は異なるか？——言語と思考の関係

言語相対性の仮説

ある言語とその言語を用いる人々の文化・思考・気質との関係については、専門家・非専門家を問わず昔から多くの人たちが関心を抱いてきました。言語は文化や思考を反映するのか。逆に言語は文化や思考のあり方に影響を及ぼすのか。このような問いに対してはさまざまな文脈の中で、さまざまな答え方をすることが可能ですが、言語と認識・思考の関係についての学問的な議論を行なう際の一つの出発点として、**サピア・ウォーフの仮説** (Sapir-Whorf hypothesis) という考え方が知られています。これはアメリカの言語学者のサピア (Edward Sapir) とウォーフ (Benjamin Lee Whorf) の研究の中で示された思想を後にそのように命名したもので、その要点は次の(1)(2)のようにまとめられます：

- (1) 言語は単に言語外世界の経験を報告する道具ではなく、言語外世界を経験する仕方そのものを規定するものであり、言語の使用者はすべてその規定から逃れることはできない
- (2) 言語が異なればそれによる規定の仕方も異なるので、同じ言語外世界の対象でも言語が異なれば当然その認識の仕方[捉え方]も異なってくる

この仮説は、個々の言語の規定の仕方の違いによって言語外世界についての認識・思考のあり方が異なることを述べたもので、**言語相対性** (linguistic relativity) の仮説とも呼ばれます。これが正しければ、言語外の客観世界はたとえ一つであっても、それに対応する認識世界は言語の数だけ存在しうることになります。

スルの英語、ナルの日本語

言語相対性の仮説との関連で従来から注目されてきた問題として、英語と日本語の認識・表現形式の違いがあります。すなわち**英語は言語外世界の事態を「スルの」に捉えて表現する傾向が顕著である**のに対して、**日本語は事態を「ナル的」に捉えて表現する傾向がある**ということです。「スルの」な捉え方をすると、事態を「動作行為主体の行ないとして捉える(ことを前提とする)」ということであり、「ナル的」に捉えるとは「動作行為主体を前面に出さず(あるいは、想定せず)、全体を推移的に[推移的な変化として]捉える」ということです(cf. 池上 1981)。たとえば、「彼がガンに罹り、それが原因で死んでしまった」という事態を捉えて表現する場合、日本語では普通次の(3)のように言うでしょう：

- (3) 彼はガンで死んだ／亡くなった

これは「彼がガンによって、生の状態から死の状態に移行した」と捉えており、「ナル的」な捉え方です。この場合、英語では(3)と平行的に(4)のように言うことももちろんできますが、表現を変えて(5)のように言うことも可能です：

- (4) He died of cancer.

- (5) Cancer killed him.

(4)は自動詞 **die** を用いたもので、日本語の自動詞「死ぬ」を用いたものとまったく同じ捉え方であると言えますが、(5)は **cancer** を主語にして他動詞 **kill** を用いて表したもので、「ガンというものが行為主体(=agent)となって、彼を死なせるという行為をした」ということであり、これは「スルの」な捉え方ということになります。この場合、日本語では(5)を直訳して「ガンが彼を殺した／死なせた」という言い方をするのは(よほどガンに強い恨みがあることを言いたい場合以外は)自然ではありません。

日本語のナル的捉え方・ナル的思考は強固なものであり、種々の表現において見られます。次の各例を参照：

- | | |
|---|-------------------------|
| (6) 彼は昨年ニューヨークに転勤になりました | (7) 私たちは6月に結婚することになりました |
| (8) 誰でも皆うつになる(ことがある) | (9) 正午／お昼／春になった |
| (10) (レストランでウェ이터が)こちらがハンバーグ定食／カルボナーラになります | |

われわれが無意識のうちにこのような表現を多用しているとしたら、日本語の話者はそれらを生み出す「ナル的な脳(?)」を発達させているのかもしれませんが。これに対して英語では、たとえば(6)の場合であれば、通常次のように表現します：

- (11) He was transferred to New York last year.

(11)は動詞が受身の形になっていますが、元の動詞 **transfer** は「(会社が社員を)転勤させる」という意味の他動詞であり、(11)はそのような「スルの」な捉え方を前提としたものだということになります。動詞の受身形で感情の経験を表すもの(例：be surprised, be delighted など)もこれと同様に考えることができます。また、(8)は英語では他動詞 **affect** を用いて次のように表現することができます：

- (12) Depression affects everyone. (affect＝(病気が)人を冒す (単に「…に影響を与える」ではない))

(12)は英語としては普通の表現です。日本語の認識・思考様式からすると多少なりとも違和感のある英語の「スルの」な表現は、「日本語脳」とは異なる「英語脳」を垣間見せてくれるものであると言えるでしょう。